

ハートとハード

Heart & Hard

川田建設(株) 代表取締役社長
KAWADA CONSTRUCTION CO.,LTD. President

川田 紳一
Shinichi KAWADA



梅雨も明けた8月の高い空を眺めながら、川田技報の巻頭言を書き始めた。依頼を受けたのが3月初旬のことだったのに、5ヶ月の間何もせずにいたわけで、実際にならないと駄目な子供の頃からの性分は歳を重ねても治らないなと我ながら感心する。窓の外に目をやると小学生くらいの子供たちがいつになく多い。そう言えば学校は夏休み。どうやって過ごそうかなんて考えなくても過ごすことが出来た子供の時分が懐かしい。

その遠い昔に思いを馳せてみる。季節は若干違ってもしれないが、杉林の中の自分が居る。上級生が同級生がそして下級生が、三三五五近所の小高い丘にある杉林にいつものように集まってきた。細い竹を探して切り取り、用意してきた竹ひごと組み合わせて杉鉄砲を作っている。完成すると竹筒の先端と手前に杉の実を詰め、竹ひごで片方を押し込む。すると竹筒の中の空気が圧縮されて先端の実を飛ばすのだ。互いに撃ちあっても痛くも痒くもない。なにしろ柔らかい杉の実だから。そんな記憶が頭をよぎる。

私の本棚の一角に故手塚治虫氏の「火の鳥」が数冊、そして何故か「鉄腕アトム」の漫画本が4~5冊残っている。当時は鉄腕アトムとか鉄人28号とかが大いに流行っていて、漫画本にそしてテレビにかじりついていたものである。特に鉄腕アトムは小さな体で大きな相手を打ち負かす、日本人には受け入れやすいと云う意味でも人気があったんだと思う。当時道路はまだじゃり道が多く、車と言っても三輪の自動車が数多く見かけられた、そんな時代あって我々はその内容が全くの空想の世界であり、子供心にも漫画として楽しむだけのものと考えていた。

ところがそれから数十年、その空想であったはずのものが一つ一つ現実のものとなり、この間の技術の進歩に

は目を見張るものがある。しかも今年は手塚治虫氏が鉄腕アトムの誕生する日を、西暦2003年4月7日と定めた、その年である。各地でアトムに関連するイベントが催され、川田工業も進めているが、いよいよ二足歩行ロボットの開発にも拍車がかかってきたように感じる。今また電子頭脳を持たせようという研究も行われているようだが、人間がロボットに使われないよう、開発側が人間のハートを置き去りにせずに進めて欲しいと願う。

そんな最中、約16万年前のホモ・サピエンスの頭骨化石がエチオピアで見つかったというニュースが飛びこんできた。東アジア人は北京原人から、ヨーロッパ人はネアンデルタール人から、時には横断的に交流をしながら、地域ごとに人類は進化してきたとする多地域進化説は打ち消され、今の地球に存在する総ての人類は皆アフリカを起源として世界に散らばって行ったとする、アフリカ単一起源説がほぼ裏づけられるようになったと云うことらしい。しかし、それにしても一体その骨がどれくらい昔のものであるかなど、よく判定出来るものだと感心する。我々の知らないところで化石の年代を測定する方法が、機械や装置が開発されているわけで、科学技術の進歩は想像をはるかに超えているように思える。

一方で部分的に人類に取って代わる可能性のあるロボットの開発、一方では歴史の教科書を変えるべき人類の祖先が見つかった。奇妙なコントラストではある。

その単一起源説が有力となってきた地球上で、そしてこの日本でも大勢の人たちが事故や事件に巻き込まれて生命を断たれている。特に今年は発生理由はともかくとして、イラク戦争でアメリカ側、イラク側に相当な数の犠牲者が出た。この川田技報をお読みになって頂いている方の御子息のような人たちが、また同年代の人たちが、

そして幼い子供までが命を落とす大変痛ましいことになってしまった。心より犠牲者の方々の御冥福をお祈り申し上げたい。それにしても最新の兵器を駆使して対峙し、撃たなければ撃たれてしまうという極限状態の中で、引き金を引くしかない彼等の心境を思うと心が痛む。お互い家族がそして恋人が居る身でありながら…。しかも戦争の様子をリアルタイムに報道しているテレビ。ついつい観てしまう、それが当り前になってしまっている自分が恐ろしくもあった。

また最近では犯罪の低年齢化が叫ばれて久しいが、今年も大変な衝撃を人々に与えた事件が起きてしまった。12才の中学1年生が4才の男児を駐車上の屋上から突き落とし、殺害した事件である。つい数ヶ月前までランドセルを背負っていた子供が犯人だった。この件だけでなく加害者の人権に比べて、被害者の方の人権が余りにも軽視され続けてきたのではとする空気が徐々に高まってきたことは至極当然のことであり、そうでなければおかしいと思うのは私だけではないはずである。何故このような悲惨な事件が簡単に起きてしまうのか。やはりテレビゲーム等が普及しすぎたせい。又その内容に問題があるのか。いずれにしろ人が人を傷つけたり殺めたりしては絶対にならないとする、人間が本来持っていなければならない最低限の倫理感の欠如に尽きると思われる。

そうかと思えばクローン技術がどんどん進化して、数年前にはクローン羊やらクローン牛やらが誕生した。そしてクローン人間を作ろうとする科学者まで現れた。確か米国ではクローン技術を人間に適用した場合には、厳しい罰則が定められているが、米国以外の科学者が次はクローン人間をと宣言したニュースを見たときは、これは大変なことになってきたぞと暗い気持ちになったものである。しかし今年になって、クローン人間は失敗したと聞いて、内心ほっとした。子供の出来ない夫婦が医療技術を借りて夫婦の子供を作るとは許されても、全く人工的に同一の遺伝子を有したクローン人間を作ろうとする所業は、あまりにも神を、そして16万年続いてきた人類に対する冒瀆以外の何物でもなく、このような科学技術者に対しては人間社会として厳罰を与えるべきであろう。

技術の進歩、科学の発達の下には、人間界として踏み外してはならない「ヒト」としての思い、いろんな過ちを犯しながら辿り着いた倫理感を決して忘れてはならない。要は人間が本来持っている「ハート」無くしては本物の技術ではないと云うことを我々は肝に命じるべきである。

また今年も年明け間もない時期に、これも衝撃的なニュースが飛び込んできた。米国のスペースシャトルの爆発事故である。大気圏に再突入した直後の事故で、テレ

ビカメラに克明に収められて全世界に配信されたことは記憶に生々しい。初めてアポロが月に着陸し、米国人宇宙飛行士が月面をびよんびよん跳ねるようにして歩いている姿を、テレビにかじりついて興奮していたのが昨日のここのように鮮明に憶えているが、それから数十年も経過して今回のような事故が起きようとは。私は勿論スペースシャトルがどのように制御されているか知る由もないが、耐熱板の一部が剥がれ落ちたことが判っているながら、何故大気圏の外へ出してしまったのか。その時点でロケットを切り離してスペースシャトルだけUターンをして着陸出来なかったのかという、単純な疑問を素人として感じた。米国の宇宙技術をもってすれば、それくらいの緊急事態は予測し、大気圏外へ飛び出す前にプログラムを切り替えるくらいのことは用意していたと思うのだが。せっかく打ち上げたんだからと云う、技術者・科学者としてのプライドが邪魔をして判断を誤ったのか。ここで間違えてならないのは、機械が、コンピューターが如何に精密であっても、戻れという判断だけは人間にしか下すことが出来なかつたろうとする点である。

さらに最近では世界各地で異常気象が観測されているが、日本も例外ではなく、台風でもないのに九州では集中豪雨的な大雨を原因とする災害が発生して、これもまた多くの犠牲者が出てしまった。このような自然現象に対しては、従来は30年に一度位の想定をしておけば良かったが、近頃は100年に一度のことが起きる位に考えておかないと間に合わなくなってきているように思われる。確かに地球規模で自然界に狂いが生じてきているような気がするが、少しでも被害を小さく抑えるための技術特にハード面の見直し並びに整備が要求されることは間違いない。

さて川田技報を今年も発刊するに際し、思いつくままに書かせて頂いたが、技術の発展・進歩の根底には「ハートとハード」が必要不可欠と常々考えている。ハートが無いあるいはハートを感じられない技術なら、そんな物はむしろ存在しない方が良いのかもしれない。勿論ソフトの発達は目覚ましいものがあり、利用すれば大変な効率性に結び付くことは否めない。しかしコンピューターが頑強な構造物を実際に造ってくれるわけではなく、ソフトだけでは手の届かない部分、つまり現場であり、機械であり、そして人間であると言うハード部分を絶対に忘れてはならない。ハードをないがしろにするような技術は本当の技術とは言えず、ハードとソフトが両輪として機能するような技術の進歩が望まれる。

川田技報は以上のような観点から、今後とも「ハートとハード」を忘れることのない、そしてそれらに裏打ちされた技術の提供を心がけることが出来ればと思う。

(2003年8月)